

● 高野山の文化財と奉納品

高野山霊宝館主任学芸員 井筒 信隆

はじめまして。高野山霊宝館の井筒です。きょうは、スライドを約60枚ほど用意しておりますので、高野山の文化財の主なものをスライドを用いながら説明をさせていただきたいと思えます。高野山は、弘仁7年(816)に弘法大師空海が真言密教の修行の道場として開創された山ですが、長い歴史を有する密教の山でありながら、平安時代中期以降、弘法大師信仰とか、その当時盛んでありました弥勒浄土信仰、阿弥陀浄土信仰が複合いたしまして、高野山独特の高野浄土観というものが生まれました。当時の宗団の人々は、今言われるような宗团的なセクト的な感じではなしに、いろんな所へ出掛けていて、いろんな勉強をされております。高野山もそういう勉強のできる所として、いろんな人が訪ねてこられました。また、高野山でお住みになって、亡くなった人も多くおられるようです。高野山で亡くなった場合に、その持ち物であったものが残っていきます。

美術史の中でも、一つの比喻なのですけれども、平野の正倉院に対し、山の正倉院としては高野山なのだと。海の正倉院に当たるものは、瀬戸内海にあります大三島なのだとことを言われる人もおられるぐらいです。ある面では、日本の文化を語っていくために欠かすことのできない重要な場所であると言われている山でもあるわけです。そういう意味で、高野山にはたくさんの文化財が伝わっております。

お配りをいたしました資料(本文33頁参照)で、「高野山の歴史と文化財」という題を一応つけさせていただいたのですけれども、その1番目に、国宝ならびに県指定文化財というものがございます。1996年の3月5日現在、国宝25件・4,695点、重要文化財177件・14,204点、それから、和歌山県の指定文化財36件・2,878点、合計いたしますと238件・21,777点という膨大な数字の国ならびに県指定の文化財が高野山に伝わっています。

国指定の文化財だけでも、全国的にみまして、

約6%のものがここに集中して伝わっているわけです。質的にも日本文化を語るうえで欠かすことのできない重要なものがたくさんここに集中してあるという、ちょっとほかでは見当たらない場所です。高野山の文化財というのは、そういうような重要な意味をもっているものが多いのです。後ほどスライドで見いただきますけれども、国宝の「仏涅槃図」という日本で一番古い「応徳涅槃図」とも言われているものとか、弘法大師の出家の宣言書と言われているような『聾瞽指帰』とか、先ほど、学長さんのほうからお話ががあった、大塔の太田荘を寄進されました後白河法皇の宸翰などを収めた宝簡集類があります。この宝簡集類は、日本史を語るうえで欠かすことのできない貴重な古文書類が多く、国宝になっています。

そういう意味で、高野山というのは、ある面では、仏教の中の密教の山というのではなしに、いろいろな宗教が入り込んで歴史が成り立ってきた山でもあります。だから、古い奈良仏教の関係のものとか、それから、当然、平安時代のもの、天台宗系統のものや鎌倉仏教関係のもの、それから神道関係、修験道関係、そういうものも資料としてずいぶん残ってきています。高野山というのは、ある意味では、歴史の中における日本の文化サロンのような場所であった部分が認められます。

先ほど申し上げましたような、国指定とか県指定の文化財ばかりでなしに、現在、117カ寺のお寺が高野山にあるわけですが、そこに伝わっております聖教古文書、それから仏画、工芸品、彫刻など、そういう諸々のものを合わせますと、その数は何十倍になるのではないかと思います。その実体的な実数というのは、いまだかつて確認をされたことはございません。

過去から、文化庁ならびにいろいろな組織が作られまして、調査はされていますが、途中でいつも頓挫しているというのが実態です。あまりにも膨大な数字になるので、途中でどうも作

業がいつも途切れてしまって終わってしまっています。聖教古文書なども、ラベルが何個もあったり、途中で放棄された目録がたくさんあったりと、そういうような状況にあるのが実態です。たぶん今世紀中にはケリがつかないと思います。21世紀にまた、いろいろな人がそういうような方面で整理をされていくのだと思いますけれども、それほど高野山というのは、文化財というのか、そういう文化遺産がたくさん伝わっているところなのということだけ覚えて帰っていただきたいと思います。

また、霊宝館のほうに、塔頭寺院の聖教とかそういう文化遺産を納めていただくように働きかけ、様々な聖教類は集めるようにしております。そのなかで宝寿院、今は専修学院と言っているのですが、高野山の僧侶の養成機関になっているところですが、そこに伝わっている聖教古文書も寄託収蔵いただいています。その未指定品の聖教の整理をしている過程で、整理にあたって見逃してはいけないのではないかなという点があります。

お配りをいたしました資料「一空書写聖教関係リスト」(本文36頁～37頁)を見ていただきますと、私が、普通部の3号箱にある一空さんの関係のものをちょっと拾い出して、奥書のところに一空さんが年齢をお書きになっていますので、そういうものを編年的に並べ替えてみたものです。

宝寿院の聖教古文書というのは、現在、特別部で103箱、普通部で124箱、それから番外としまして31箱、合計258箱伝わってしまっていて、総点数にしますと約6万点ぐらいになるものです。その中で、サンプリングをし、一空さんの書写次第等を編年史的に示してあるわけですが、一番最後の行のところに括弧で結んだ数字があります。その数字は、昭和4年から5年にかけて、中野達慧さんが宝寿院の聖教を整理をされたときの番号です。無作為に、箱の中のものを順番に整理番号を打たれておりますので、私が作った編年的な感じの並べ方とはずいぶん違ってきます。この箱の中には105件ほど聖教が入っています。その中で、一空さんの関係のものは、だいたい一箱の中に6割ぐらいあると思います。

そのほか、ここには挙げていませんけれども、

一空さんがお経とか、次第とか、そういうものを写すに当たりまして基本図書になったものを、方々から集められたと思われるものも保管されております。書写した人の名前が違っておりますので、その編年資料の中には入れておりませんが、一空さんがどうも自分の勉強のために集めたものではないかと思うものがずいぶんその中に含まれております。ということは、すなわち、この一箱は、一空さんの一つの人生をかけた勉強のあとを物語ることができる大変貴重なものなのということが言えるのだと思います。

そういう意味で、図書館とかそういうところでの整理の方法は、博物館とは少し様子が異なってくるのだと思いますけれども、一箱単位で寄贈を受けたり、買われたときには、そういう点も含めて考慮をされたうえで、図書館の資料として、また、閲覧に遇するための整理番号を付けていただく工夫も必要ではないかと思います。私は、現場で働いている人間として、史料の取り扱いに、そういうことも考慮する必要を常日ごろ感じております。

霊宝館でも、中野達慧さんの整理をもとに宝寿院さんから預かっておりますので、その番号を変えるわけにはいきませんが、最終的には、そういうような一応のかたちの編年史を作りながら、一箱一箱整理していつかあげたいなと、将来の研究者のために、そういうかたちのものを作ってあげたいなとは思っております。

前置きはこれぐらいにいたしまして、次に高野山の文化財として、どういうものが伝わっているか、お話をさせていただきたいと思います。配布しました資料(本文33頁以下を参照)の逐一、文化財の歴史的背景を話しているわけにもいきませんので、下のほうに、各世紀の主立った文化財を列挙しておりますので、それに基づき主なものをスライドで映させていただき、説明をさせていただきます。

スライドがあまりよくないものもあるかもわかりませんが、その点はご辛抱願いたいと思います。



先ほど申し上げましたように、高野山というのは西暦816年の弘仁7年に開かれたわけです。

けれども、最初の【スライド1】は、鎌倉時代の終わりぐらいの高野山の情景を描いたものです。高野山に昔から伝わっており、江戸時代に模写されたものを集めた国宝の「又続宝簡集」第61に収められている高野山の風景画の1画面です。高野山の中心になっております伽藍のあたりを描いている部分です。



【スライド1】 国宝 又続宝簡集巻第61 金剛峯寺蔵

これが根本大塔で、この建物が金堂です。今、銅板葺きになっているのですが、昔は檜皮葺の建物です。こちらのほうに桜の木が描かれておりますが、この桜の木は、『平家物語』に出てくる清盛と弘法大師の対面の桜とされている桜です。

それから、こちらに六角経蔵というものがあります。鳥羽上皇のお后でありました美福門院が高野山に奉納されました荒川経と俗称されています一切経を納めていた経蔵です。

こちらのほうには、三鉢の松とか御影堂が描かれています。御影堂には、真如親王という弘法大師の十大弟子のお一人がおかきになりました真如様の弘法大師の御影が秘仏として今でも祀りされているところです。

その横のほうに准胝堂がありまして、その横のほうに、孔雀堂というお堂がございます。快慶が作りました孔雀明王像が安置されていたところです。

それから、こちらの両塔の横に塔が建っていますけれども、これは、新御塔という塔です。反対の東のほうに東塔があります。これは鳥羽上皇が高野山に造られた塔です。現在の塔は、昭和になってから再建されたものです。

その横のほうには三昧堂というお堂があります。その前には、西行桜という伝承のある桜が

あります。その横に、後醍醐天皇のお建てになりました御願堂の愛染堂というものがあります。

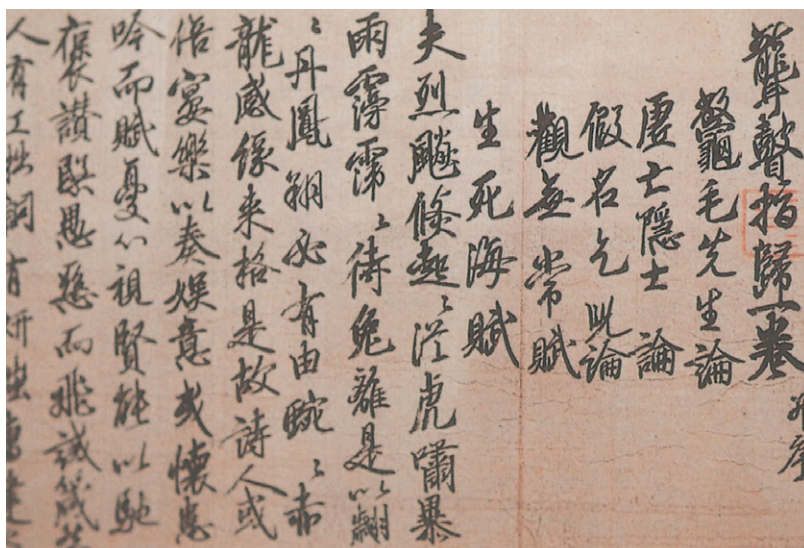
こちらのほうには、先ほど、学長さんからお話がありました、鎌倉幕府との関係があります高野山の学問所、問答などをするような場所でありました勸学院というお堂が建てられています。

このスライド画面で言えることはそれぐらいなのですが、それぞれの建物にはいろんな歴史をもっております。



これ【スライド2】は、弘法大師空海が24歳のときにお書きになりました国宝になっております『筆啓指帰』です。その当時、儒教・道教・仏教という三つの教えがありまして、その中で、私は仏教に基づいてお坊さんになって人々を救っていくのだ、ということを知人とか親族の人々に納得していただくためにお書きになったものなのだと言われています。

宝亀5年に弘法大師は今の善通寺市、讃岐のほうでお生まれになりまして、地方豪族の生まれなのですが、18歳のときに中央の大学のほうへ入って、官僚の勉強をされていたわけなのですが、それに飽き足らずに、大師は、人生目標として、なぜ生きているのか、なぜ



【スライド2】国宝 聖誓指帰 二巻 金剛峯寺蔵

人々は死んでいくのかという疑問のなかで、生きている間に仏教の道に入って、自分自身が救われたいというような気持ちがあったのだと思います。地方豪族の子息として期待を担われて大学へ入ったのですけれども、途中で放棄をして中退をするときに知人や親族を対象にお書きになった文書です。いろいろな登場人物によって話が展開していくことから、日本で最初に書かれた戯曲風の作品とも言われています。

ご存じだと思いますけれども、弘法大師空海は、嵯峨天皇、橘逸勢とともに、日本の三筆の一人に数えられていますけれども、この文字を見ていただきますと、なるほどとうなずいていただけます。

実物については、特別に大学のほうからお願いがありましたので、明日、霊宝館で『聖誓指帰』をじかに見ていただきます。中国製の紙に空罫、竹ヘラのようなもので線を入れまして、行を狂わさないように書いたものです。中国の書聖と言われております大変有名な王羲之の書法に習熟なさって、お書きになっています。24歳の若かりしころの文字ですけれども、中国人をうならせるような、達筆の書であることが、この画面を見ていただいただだけでもわかります。

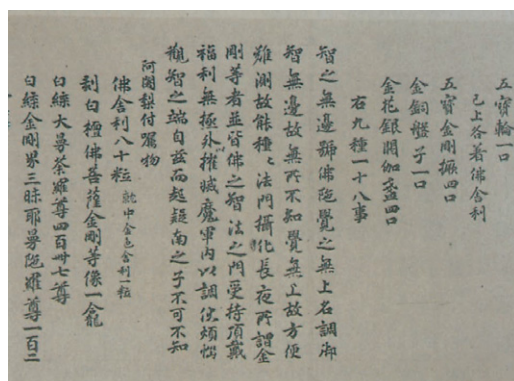


弘法大師空海は、延暦23年、804年になると

と思いますが、中国に渡りまして、真言密教の勉強をするために求法の旅に出ます。そうして、長安の都で恵果阿闍梨から真言密教の正系の法を授かりまして、密教の第8祖の位につき、大同元年に日本にお帰りになったわけですが、そのときに、恵果阿闍梨さまからインド以来の正系の密教の伝授を受けて祖師になったことを証明するために、阿闍梨付嘱物というものを授

与されるわけです。こちらに授けられた阿闍梨付嘱物というものが書かれてあります【スライド3】。

そのほか、曼荼羅とか密教にかかわるものをたくさんお持ち帰りになって、宮中のほうに報告はされているのですけれども、その『御請来目録』の中に「刻白檀仏菩薩金剛等像 一龕」というものの記録がありまして、それが次にスライドで映します国宝の「諸尊仏龕」というものに当たると言われています。インド、中国、日本という3国伝来の、祖師から祖師に伝わってきたものなのだとすることを、弘法大師自らが、この『御請来目録』の中にお書きになっている大変由緒のあるものが高野山に伝わっています。



【スライド3】国宝 御請来目録 一卷 京都・東寺蔵



これ【スライド4】が「諸尊仏龕」です。ちょっと今回、展示はできませんけれども、今年、比叡山延暦寺と高野山金剛峯寺が共催した展覧会の「比叡山と高野山」という名宝展の中で紹介をさせていただいたものですが、白檀製の30センチばかりの小さな仏龕です。中国の石窟寺院の様子を参考にして作られたのではないかとされています。中国の8世紀の作品です。

真ん中にお釈迦さまがおられまして、その周りに羅漢さんとか声聞衆がおられます。それから、下のほうに仁王さんが配置され、横のほうには、文殊さん

とか、それから普賢さんとか、そういうような脇侍仏がたくさん彫られてあります。35~36体の尊が彫られてあります。30センチの小さな仏龕の中に、丸彫に近いような彫法表現というのは、なかなか技術的に表現できないのですけれども、大変すばらしい仏龕です。

白檀の木というのは、皆さんよくご存じだと思います。インド産と東南アジア産がありまして、インド産のほうが肌合いがものすごく赤いのです。どういうわけか、東南アジア産の白檀の木というのは黄色っぽいのです。そのへんが、インド産の白檀と、それから東南アジア産のものとの木の違いがあるわけですが、この仏龕はインド産の仏龕です。

後ほどスライドで見ていただくのですが、世界で一番古いと思われる曼荼羅があります。板彫の曼荼羅なのですが、その板彫の曼荼羅は、どちらかというと黄色っぽい色をしておりまして、東南アジア産の白檀の木なのだとされています。

白檀の木というのは大変大きな木に成長するのですが、そのまま木を使いません。1

回土の中へ埋めます。成長期のところを腐らせて、真ん中の心材だけを使うのです。なかなか白檀の木というのは貴重な木なのです。香木で知られていますが、当時の中国の王朝にありまして大変貴重なものとして取り扱っています。

中国では檀像は、白檀の木とかそういう香木で仏さんを作られるのが普通なのですが、だんだん入手が困難になって代用材として桜の木を使って作られるようになっていきます。そういう意味では、この小さな仏龕というのは、木の値打ちもありますし、歴史的背景もあって、大変貴重なものと言えると思います。

諸尊の表現というのは、インドグプタ朝時

代頃の表現をされているのですが、この仁王さんなどの表情というのは、中国の表現で、どうもインドで作られたものでないかと、専門家の中ではみられています。それにしても、現在、中国のほうで、こういうような仏龕が伝わっていません。日本にしか伝わっていません。そういう意味で大変貴重な、世界遺産に匹敵するような貴重なものと言えるものです。



それから、弘法大師空海は、そういうような阿闍梨付嘱物とか、密教にまつわる様々な道具類や曼荼羅とか、絵画類もたくさん持って帰ってきておられるのですが、高野山に伝わっているものとして、中国の唐時代のものではないかとされておりまして五銚杵とかの密教法具が8個ほど伝わってまして、重要文化財になっております。

中には、日本で弘法大師が指導いたしまして、請来の密教法具を参考にして作らせたものも、



【スライド4】国宝 諸尊仏龕 一基 金剛峯寺蔵



【スライド5】重文 密教法具の内 五鈷杵 金剛峯寺蔵

その中には含まれています。この五鈷杵【スライド5】と、それから独鈷鈴・独鈷杵というものがありまして、それらは中国製のものと言われています。ほかのものは、三鈷杵とか、五鈷鈴とか、そういうものは、中国のものを参考にして作られた平安時代前期のものではないかと言われています。



これ【スライド6】は、普門院というお寺に伝わっている重要文化財の白檀製の仏龕です。真ん中の中央龕、左右の脇龕、下のほうの龕など合わせ一箱の中に納めてあるものです。実は、この下の龕の部分は、後世の人がちょっと配置を間違えまして、本来的には、この上部のほうに来るべきものなのです。そういうように部分的に込め直すのに間違った部分がありますけれども、大変すばらしい、丸彫に近い彫法の中国唐時代の作品で、重要文化財になっています。

日本でも、こういうような中国製の仏龕というのは、あまり数が伝わっていないのですけれど、



【スライド6】
重文 釈迦如来及諸尊像 一基 普門院蔵

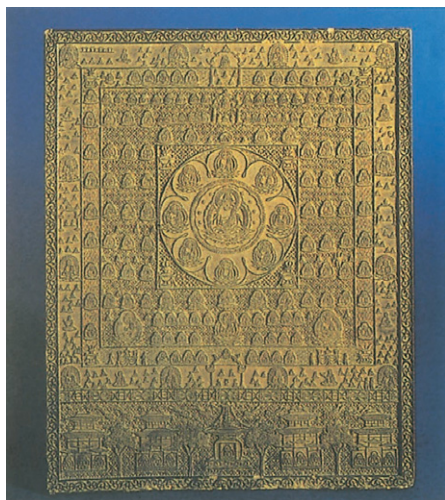
ども、先ほどの「諸尊仏龕」とともに中国の唐時代の8世紀の作品が高野山に2点が伝わっています。その一つの大変貴重な仏龕です。



先ほど、東南アジア産とインド産の白檀の木のお話をさせていただいたのですが、これ【スライド7】は、どちらかという、先ほどの「諸尊仏龕」に比べますと黄色っぽいのです。どうも東南アジア産の白檀の木で彫られたもののようです。この板彫の曼荼羅は、弘法大師が中国から恵果阿闍梨に授かって持って帰ってきた通称「現図曼荼羅」と言われる曼荼羅よりも、組織的には大変古い部分があります。

天台宗の円珍さんが、弘法大師のあと、唐時代の末にあたりますけれども、中国に行かれまして、より弘法大師よりも古いかたちの曼荼羅を求められました。その中に、善無畏さんが製作した胎蔵大曼荼羅の図像を写されて帰ってきています。その図像を「胎蔵図像」と名前がつけられています。さらに「胎蔵旧図様」というものも写されていますけれども、その仏さんの表現にこの曼荼羅の諸尊が大変近いものがあります。「現図曼荼羅」といいますのは、たくさんのお手をもった表現の仏さんが多いのですが、この板彫の曼荼羅では二臂の像が多いのです。人間の体つきと同じような形の尊像が大変多く彫られています。

ただし、この曼荼羅の中で、真ん中の中台八



【スライド7】
重文 板彫胎蔵曼荼羅 一枚 金剛峯寺蔵

葉院のところに、大変特殊な円が彫られてあるのです。これは、「胎蔵図像」も「胎蔵旧図様」も「現図曼荼羅」にもない要素です。霊宝館で後ほどもう一面の中国製の板彫曼荼羅を見ていただくのですが、そういう曼荼羅を見比べていきますと、中国で伝わっていたものが、どうも同じ曼荼羅というものはありません。本来曼荼羅は阿闍梨が修法をするたびに作ったものであって、基本的な組織は変わりませんけれども、仏さんの配置とかそういうものはどんどんどんどん変わって行って、何一つ同じものがなかったのではないかと思います。

だから、そういう意味では、弘法大師空海が持って帰ってきた「現図曼荼羅」というのも、曼荼羅の中の一つのある時期の曼荼羅であったのではないかなというのが私の気持ちです。そういう背景を伺える大変貴重な中国製の板彫の曼荼羅です。

昔は、一般の研究者は、これは印仏、ハンコを押したときのものではないかなと、通常一般に言われていまして、論文とか展覧会の図録などで、印仏なのだといって、よく紹介はされていたのですが、よく見ていただければ、何も墨の跡はありませんね。印仏に使う場合には、尊像を反対に表現しないといけないのです。でないと、判を押したときに通常の仏さんの姿形にはならないのです。左右が逆転してしまいます。そういう意味で、明日見ていただきますけれども、もう1面の桜で作られたこういう同じ板彫曼荼羅の後ろのほうに取っ手が付いていま

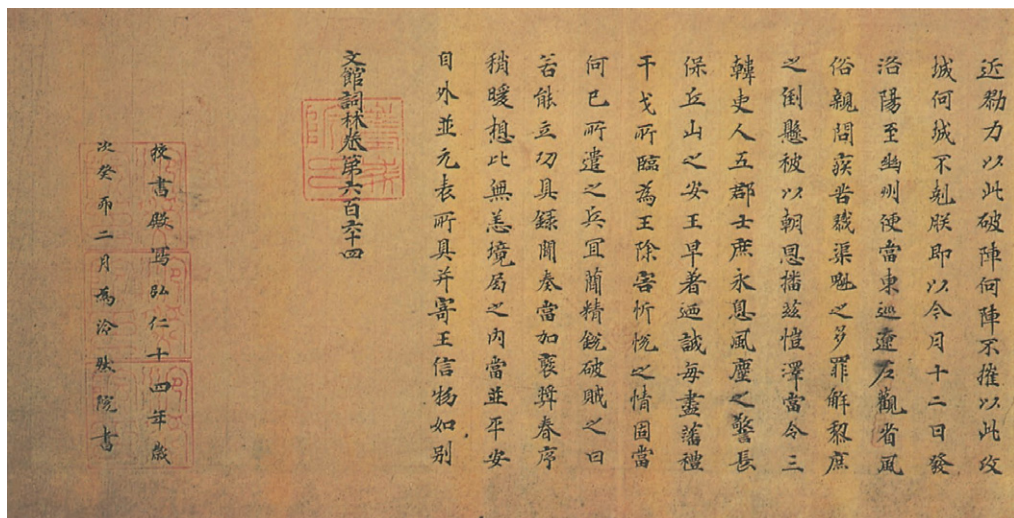
して、その用途は密教の灌頂の道具に使っていたものではないかと思われます。

現在、中国で行われておりました灌頂という儀式の方法論、どのような内容のものが行われていたのか、どういう道具で行われていたのか、というのがわからない部分があります。どうも胎蔵界の曼荼羅だけが残っているので、そういうような取っ手が付いているもので、胎蔵界に基づいたような受明灌頂に使われたものの道具ではないかなと思われます。

この板彫の曼荼羅の後ろのほうに、平清盛とか平家一門、安徳天皇など諸々の人々が結縁した名前の墨書があります。どうもずうっと調べていきますと、和歌山県の南のほうにあります熊野信仰で栄えました那智山のほうにおられた、真言系統の念仏聖の人がこういうものを日宋貿易で手に入れて、いろいろな所へ訪ねていき、結縁寄進を得ていた一つの証拠的な内容を含んでいるようです。この曼荼羅は、鎌倉時代の初め頃に、高野山の弘法大師のお御影がお祀りされております御影堂に奉納をされております。そういうような歴史的なことが、1枚の板の曼荼羅からいろいろなことがわかってきます。



これ【スライド8】は、実は嵯峨天皇の手元にありました大変貴重なものです。「文館詞林」という国宝になっているものです。正智院というお寺に伝わっておりますものなのですけれど



【スライド8】 国宝 文館詞林 正智院蔵

も、こちらのほうに嵯峨院のハンコがバタバタバタバタと押してあります。弘仁14年という年号の奥書がありますけれども、弘仁14年に、中国から輸入した「文館詞林」というものを写したもののようです。実は、この後ろのほうに、天台の僧侶が写経をした「法華相對抄」というものが写経されたものが残っております。だから、どうも嵯峨天皇の手元から直接に高野山へ伝わったものではないに、天台のお坊さんが一度手にして、そのうち高野山のほうに持ってこられたものなのだと考えられます。

「文館詞林」というのは、中国の漢時代から唐時代の漢詩集を1,000巻にまとめて作った漢詩集の詩文集なのですが、現在、中国に残っておりません。もう唐時代の終わり頃、宋の初め頃には、それが散逸してしまってわからなかったと言われています。日本のお坊さんが初めて「文館詞林」というものがあるのですよということを中国の人に教えたという話が伝わっています。

現在、正智院に12巻、それから宝寿院に1巻、それから、宮内庁書陵部に1巻だけ残っています。だから、高野山に13巻あるのです。これらは、分巻されていたものを1巻にまとめているので、正智院のものは17巻分が残っています。宝寿院のものは2巻分が残っているのです。大変貴重なもので、江戸時代にまぼろしの書「文館詞林」の一部が高野山にあるということで、木版にされて印刷された経緯もございます。大変貴重な存在の「文館詞林」です。

【スライド9】
重文 木造大日如来坐像 一躯 金剛峯寺蔵



◆
この仏像【スライド9】は、9世紀の終わり頃の作で、高野山の現存しております仏さんの中で一番古い仏像の大日如来像です。たまたま国の指定のときに西塔のほうで安置をされておりましたので、「西塔の大日如来」という名前が付けられています。檜の一本造りの大変ボリューム感のある仏さまで、平安時代の貞観仏の一つの特色であります森厳な感じのします雰囲気を見せているものです。仁和年間ぐらいに作られたものではないかと言われている大変貴重なものです。

◆
この舍利器【スライド10】は、高野山大学の人でも見たことがなかったと思います。実は、平成元年に、弘法大師のあとを継いだ高野山の第2世真然僧正のご遠忌がありましたが、その記念事業として金剛峯寺の裏山にあります県指定の真然堂を解体修理することになって、その土壇をどのような状態になっているのか確認するためにトレンチを入れましたところ、こういう真然さんのお舍利が入った舍利器が出てきたのです。

平安時代、9世紀の終わりぐらいの作品なのだとされていますけれども、官立の窯で造られたものです。その当時、このような釉薬のかかった陶器というのは国が管理していました、国が組織しております官立の窯でしか焼かれなかったのです。勝手に民営で焼くことができなかったのです。どうもこの色や形からみて愛知県の猿投の官立の窯で焼かれたものだとされています。四足、四つの足をもっているものです。普通、このような焼物は地下に

埋められてあっても、たいいてい壊れてしまって、なかなか完形のような形で伝わらないのが普通なのですけれども、ほとんど完形の状態で伝わったものなのです。



【スライド10】
(再埋納)緑釉四足壺 一合 金剛峯寺蔵

そういう意味で、

掘り上げた段階で、国が直ちに「国宝に指定しましょう」と言われたのですが、高野山では、弘法大師の跡を継いで苦勞されて、高野山の一つの一大伽藍を完成させた真然さんの遺徳を偲びまして、やはり信仰的な意味もあって、再度元の位置に戻してあげようということになりまして、複製と報告書がつくられ、現物は現在、真然堂の下に再埋納をさせております。国宝に匹敵する舍利壺がもう一度地下のほうに安置されたわけです。



この像【スライド11】は、「波切不動」という重要文化財になっています不動明王立像です。南院というお寺に伝わっておりまして、弘法大師にいわれがあります。

伝承といたしましては、弘法大師空海が中国からお帰りになるときに、恵果さんから命じられまして不動明王をお彫りになったのだと。そうして帰国の航海中、難破しそうになったので、この不動さんに祈念をいたしますと波が平穏になり、無事に帰国することができたという伝承があります。

記録的にみますと、もともと京都に弘法大師がお住みになっておりました高雄の神護寺、そこに伝わっておりまして、さらに方々を転々といいたしました。熱田神宮から、高野山の伽藍にございます山王院というところに持ってこられまして、さらに山王院から南院に移ったと言わ

れている伝承のあるものです。

一般的な美術史の世界の中では、どうも日本に伝わっているお不動さんの姿とちょっと違うので、衣の下の方の表現とかそういうものから比べると、平安時代の中期ぐらいの作品ではないかと言われているのですが、実は、上のほうに漆がかぶってしまっていて、足のうら白木のままなのです。材質が中国製の、目のつんだ桜材で作られているので、私たちが考えているのは、伝承どおり中国で作られたもの、弘法大師が彫ったかどうかはわかりませんが、中国の仏さんである可能性も秘めていると思われる大変貴重な不動明王像です。



それから、こちら【スライド12】のほうは高野山で一番古い不動明王像です。檜の一本造りで、10世紀の初め頃に作られたものではないかと言われているものです。大変ボリューム感のあるお不動さまのお姿です。通常、お不動さんのお姿というのは、片目をギョロッと見開き、片目を伏せており、「上求菩提下化衆生」という言葉を表現したものとされています。そういう顔をされているお不動さんをよくご存じだと思いますけれども、古いお不動さんの形は、両目をカッと見開いております。通称、弘法大師様という、弘法大師空海が中国から伝えた不動明王の顔の表情に大変近いものがあります。

先ほどから申し上げました片方の目を開け

て、片方の目を伏せている姿形というのは、10世紀に天台宗の安然という人と、それから真言宗の淳祐という人が、時を同じくして、お不動さまの十九相観というものが説かれました。お不動さまのお姿を思い浮かべていく方法、観想の仕方を説くものなのですが、そこに出てくるお

【スライド11】 重文 木造 不動明王立像 一軀 南院蔵



【スライド12】 重文 木造 不動明王坐像 一軀 正智院蔵



不動さんのお姿が、それ以降、一般的になっていきます。

この像は、十九相観によらない大変古い形を伝えているお不動さまなのだということがいえる像です。正智院というお寺に伝わっています重要文化財の像です。



これ【スライド13】は、先ほど一番最初の頃に申し上げたのですけれども、応徳3年(1086)に製作された涅槃図です。高野山の文化財の中でも超一級のもんです。世界遺産に匹敵するような、日本の文化を語るのに欠かせない有名な国宝の「仏涅槃図」です。

お釈迦さまの涅槃図図といえますと、2月の15日に涅槃会(常楽会)という法会が行われるのですけれども、その本尊さんとして安置をされ、お釈迦さまの遺徳を偲ぶために掛けられ、お祀りをされてきたものです。

真ん中に、お釈迦さまが宝台の上に横たわっております。周りのほうに、お釈迦さまのお弟子さんとか、仏教信者とかさまざまの人々、それから、こちらのほうに『法華経』で出てくるいろいろな登場人物とか、そういうものが描かれております。

下のほうには獅子が1匹かいてあります。皆さん、涅槃図をご覧になったことがありますか。方々のお寺によく伝わっておりますので見ていただきますと、いろいろな動物や、江戸時代になりますと虫までかいてあります。いろいろな動物とかそういうものがたくさん画面の中に導入をされている涅槃図をご覧になることが多いと思います。鎌倉時代以降の涅槃図というのは、比較的、動物とか虫とか、そういうものが盛んにかかれるようになっていきます。お釈迦さまの遺徳を偲ぶために、世の中のすべてのものが嘆き悲しんだという表現を具体化するために動物とか虫とか様々なものが画面

の中にかかれるようになっていきますけれども、中国の敦煌のあたりの、涅槃図などを見ていきますと、やはりこの絵と同じように、獅子1匹だけが描かれてあるものが大半です。だから、この図も、中国の古い画像を基にしているように思います。

ただ、お釈迦さまの寝方です。普通、右手を膝枕にして横になって寝るのが普通なのですが、このお釈迦さまは、日本人と同じように上を向いて寝ているのです。どうも日本的な感覚のなかで作られたものではないかなと言われています。この彩色そのもの自身も大変中間色が多く使われて、日本の自然の風景の中で彩られた様々な色に近いものを盛んに彩色として使われています。この図の表現は日本の文化を語るうえで、また、平安文化というものや日本人の自然観を知るための手掛かりになるのではないかという内容も含む大変すばらしい涅槃図です。



これ【スライド14】が上のほうの画面です。山水がかいてありまして、このへんに沙羅双樹が2本分かれて、2本が花が咲いております。それぞれ顔は個性的であります。

ただし、鎌倉時代以降の涅槃図といえますと、

【スライド13】 国宝 仏涅槃図 一幅 金剛峯寺蔵





【スライド14】国宝 仏涅槃図 部分1



【スライド15】国宝 仏涅槃図 部分2



【スライド16】国宝 仏涅槃図 部分3

お釈迦さんが亡くなるので、大変慟哭をして嘆き悲しんでいる激しい泣き方をした表現のものが普通なのですが、この絵は、どちらかといいますと、押し殺したような静寂の中の悲しみというものを実によく表現をしています。平安時代には、あまり極端な慟哭表現ではなしに、静かな感じの中に寂というものをこの画面の中に生かそうと画家は考えたのではないかと思います。



これ【スライド15】も同じ下のほうの画面です。大変個性的人物表現がみられます。このような短冊型には尊名が全部書いてあるのです。

この涅槃図の情景は、『法華経』などに説かれています涅槃の世界を参考にしていると言われています。



お釈迦さまの着衣のところ【スライド16】に金箔を細く切りまして、いろいろな美しい截金模様が付け加えられています。また、その肌の色は、薄い黄色をしています。この色は、ガンボージという染色顔料で彩色されています。大変柔らかい感じの黄色の色が見受けられます。



これ【スライド17】は、久安3年、天台宗の園城寺(三井寺)の画僧でありました定智という人が高野山のためにおかきになりました「善女竜王」というものです。金剛峯寺に伝わり国宝になっているものなのです。

「善女竜王」といいますと、天長2年だったと思いますけれども、弘法大師が早魃で苦しんでいる人々のために、神泉苑という所で雨請いをされました。雨請いをされると、愛宕山の方から竜王さんが現れまして、にわかに雨を降らして早魃から民衆を救ったという伝承があるのですけれども、その伝承をもとに善女竜王の姿をおかきになったものです。



これ【スライド18】は国宝になっています。勤操大徳という、高野山の普門院というお寺に伝わっているものです。平安時代、だいたい似絵といますと、鎌倉時代に神護寺に伝わっている頼朝像とか、そういう武将の姿が残っています。似絵は対象人物にできるだけ近い姿を描き、その人間のもっている性格というものを表現する表現絵で、鎌倉時代に普及しますけれども、この絵は、それよりも少し前、平安時代12世紀の前期に中国の似絵の技法を参考にしていたのではないかとされている国宝の「勤操大徳像」です。

これも、もともとは奈良県の吉野の天川村の求聞持堂というお堂にもともとあったものなのです。ここに銘文があるのですけれども、室町

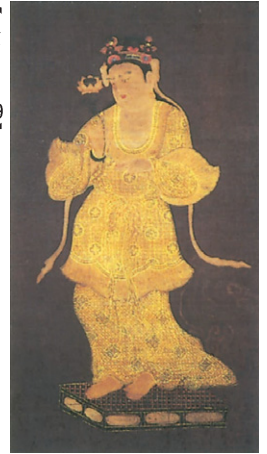
【スライド17】
国宝 善女龍王像 一幅 金剛峯寺蔵



【スライド18】
国宝 勤操大徳像 一幅 普門院蔵



【スライド19】
国宝 伝船中湧現観音像 一幅 竜光院蔵



時代以降に高野山にどうも移されたもののようです。上のほうには、弘法大師が勤操大徳のために追悼文を書いているのです。『性霊集』に残っておりますけれども、その文章を写したものが書かれてあります。



これ【スライド19】は「伝船中湧現観音像」といまして、竜光院に伝わっています。平安時代の12世紀に作られました国宝の絵です。「伝船中湧現観音像」は、弘法大師が中国からお帰りになるときに、荒れる波を観音さまに祈念して、静かな波に変えたという伝承があります。大変変わった観音さまです。この衣のところ、先ほどの涅槃図と同じく、金箔を細く切って模様にした截金模様があります。実に美しく大変工芸的な趣向に富んだものです。



これ【スライド20】は、先ほど、清盛の話を学長さんがされていましたが、平清盛が高野山に奉納いたしました「血曼荼羅」というものです。『平家物語』に出てきます大変由緒のある、大変貴重なものです。金剛界と胎藏界の曼荼羅の一对のもので、高さがだいたい5メートル50ほどあります。横が5メートルぐらいあります。一幅約60キロほどある大変大きな曼荼羅です。

ご存じだと思いますけれども、こういう曼荼羅で一番古いものといえます

と、高雄の神護寺に伝わっている国宝の、金と銀でかいた曼荼羅がありますけれども、彩色の曼荼羅で、弘法大師が中国から持って帰ってきた「現図曼荼羅」の系統の中で、現存している中では時代的には一番古いものです。この曼荼羅の仏さまの表情は、高雄の曼荼羅の図像を写しています。

そういう意味で、由緒やあるいは物語に出てくる伝承とは別に、「現図曼荼羅」の彩色品として最古の曼荼羅ということで、大変貴重な重要文化財の曼荼羅です。残念ながら、ずうっと使っておりまして、彩色などが退色しているのが残念なのです。



これ【スライド21】は金剛界のほうです。先ほどは胎藏界、こちらが金剛界の曼荼羅です。



これ【スライド22】は、平安時代の中期、12

【スライド20】
重文 両界曼荼羅図(血曼荼羅)
二幅の内(胎蔵) 一幅 金剛峯寺蔵



【スライド21】
重文 両界曼荼羅図(血曼荼羅)
二幅の内(金剛界) 一幅 金剛峯寺蔵





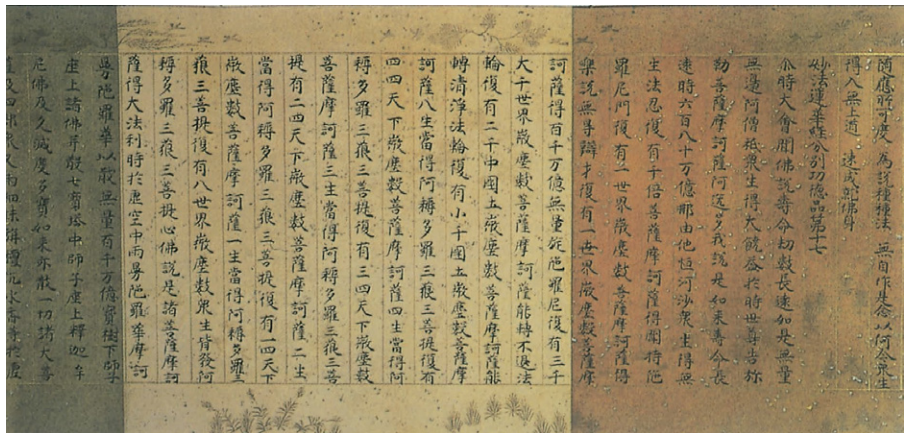
【スライド22】
重文 阿弥陀浄土曼荼羅図 一幅
西禅院蔵

世紀の作品、西禅院というお寺に伝わっています重要文化財の「阿弥陀浄土曼荼羅図」です。阿弥陀さまの極楽浄土の世界をかいたものです。なかなか平安時代のこういう極楽浄土の情景

をかいたものというのは残っていないのです。奈良の国立の博物館に、同じような形のものが1点ありますけれども、そのほか、「智光曼荼羅」とか「当麻曼荼羅」とか、奈良時代の古い曼荼羅があって、鎌倉時代に「当麻曼荼羅」がたくさん作られるようになりますけれども、平安時代のこういう浄土図としては大変貴重な存在で、重要文化財になっているものです。



この像【スライド23】は、平安時代の終わりの久安3年に、藤原摂関家が高野山に金剛心院というお寺を造られ、そのお寺に二つの塔が造られました。どうも胎蔵界の世界を表します多宝塔と、それから、金剛界の世界を表します多宝塔の2塔を造られたようですけれども、その中で、金剛界の五仏を安置しておりました塔の尊だけが現在残っています。五尊を本来はお祀りをされていたようですが、阿閼如来と宝生如来という2像が焼けてなくなっています。あと、この大日如来と、お釈迦さま、阿弥陀さまの3軀が残っています。



【スライド24】国宝 色紙法華経 一巻 金剛峯寺蔵

あす、十分説明する時間がないかわかりませんが、陳列館のほうに安置しておりますので、ご覧いただけたらわかりますけれども、火をかぶった跡があるので。この黒くなっているところは火がかぶっています。どうも金箔が焦げてしまった部分のようです。

この大日如来さまのお顔をご覧になっていたきますと、白杵の石仏で、今は修理されておりますけれども、顔が落ちておりました大日如来のお顔に大変近いのです。作者はどうも同じではないかと言われています。康助という仏師が作った作品ではないかと専門家の中ではみられている大変貴重な、平安時代の終わりぐらいの作品です。



これ【スライド24】は国宝の「色紙法華経」と言います。いろんな色の紙をつなぎ合わせて『法華経』を書いていってあります。もともとは『法華経』全巻が伝わっていたのだと思いますが、たまたま、この1巻のみが伝わっております。これと共巻であったらうなとい

【スライド23】重文 大日如来坐像 一軀 金剛峯寺蔵



うのが愛知県の方で見つかっています。



これ【スライド25】は「金銀字一切経」というお経です。国宝になっています。このお経はもともと平泉の中尊寺に伝わっていたお経です。現在、4,296巻が高野山に伝わっています。本家本元の平泉の中尊寺のほうに15巻、最近1巻お買いになりまして、16巻になっているのですけれども、藤原3代の初代清衡が中尊寺に奉納するために作らせた『一切経』です。もともと5,300巻ほど作られたようですが、現在、高野山に4,296巻と、中尊寺に16巻と、観心寺などにも伝わっています。

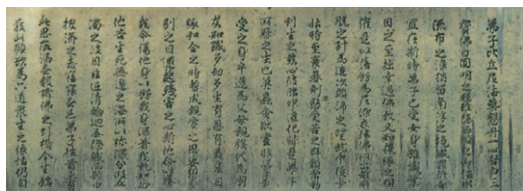
金と銀で交互にお経の文字を書いているのが、この『一切経』の一つの特色です。東北は金とか銀の産地だったので。だから、ふんだんに金と銀というものが手に入るものですから、そのような文化というのが育っていきます。その名残として、中尊寺へ行かれますと金色堂があります。金箔を貼った大変荘厳な感じのします小さなお堂で藤原3代のミイラがお祀りされているお堂です。大変質の高い平泉文化を語るこのできる一切経です。



実は、これ【スライド26】も将来国宝になるべきものだと言われているのですけれども、奥の院の弘法大師の御廟のそばに、比丘尼法葉という人が、『法華経』とか、いろいろな絹の上にかいた曼荼羅とか、そういうものを合わせて、弘法大師の御廟のそばに埋められた埋納経です。この経筒が昭和40年に発見されました。



【スライド26】
重文 比丘尼法葉埋納経 一具(経筒) 金剛峯寺蔵



【スライド27】重文 比丘尼法葉埋納経の内(願文)

その中から、比丘尼法葉さんがお書きになりました願文が出てきました。これ【スライド27】が願文です。普通、こういうような経塚遺物というのは、紙のものとかそういうものは腐ってしまうのが普通なのですが、弘法大師のおかげというのか、お守りをされていたというのか、腐らずに、その当時の状態に近いような状況で出土しました。その当時の弘法大師信仰の様子や、それから、阿弥陀、弥勒浄土信仰というのが、この願文の内容でわかります。願文の内容は、私は、いろいろなかたちで仏教の信仰をもって、さまざま作善の事業、お経とか仏像とか、そういうものを一生かけて作ってきました。私は、弥勒仏が下生されます56億7,000万年後に説教されるときに、私が写経したお経をもってその法会に参加をしたい。それまでの間、弘法大師、お願いですから私のお経を守ってください、という

ことを切々と書かれてあります。

その当時の人々の信仰の状況を直接お書きになっているので、心がよく伝わってくる内容の、大変すばらしい願文です。



これ【スライド28】は、平安貴族が高野山に奉納した唐櫃です。たぶん、先ほどのような「色紙法華経」とか、そういう『法華経』の装



【スライド28】
国宝 螺鈿蒔絵小唐櫃 一合 金剛峯寺蔵



【スライド29】
国宝 金剛峯寺不動堂 一棟 金剛峯寺蔵



【スライド30】 不動堂(室内)



【スライド31】 国宝 八大童子立像群 金剛峯寺蔵

飾經を入れて、高野山に奉納したのではないかとされるものです。カキツバタとか、それから千鳥とか、水辺の自然の情景を工芸的にデザイン化されたもので、平安文化を語るうえで欠かせない、高尚な感じのします、すばらしい螺鈿の蒔絵の小唐櫃と言われています。金剛峯寺の国宝になっている螺鈿の小唐櫃です。



これ【スライド29】は、現在、来年の9月で完成するのですが、3年計画で解体修理をしております国宝の不動堂です。建久8年に、行勝上人が八条女院の援助を得ましてお建てになったと伝えられておりますお堂です。実は、解体修理をしている過程のなかで、年代的には建久8年まで、お堂そのもの自身は上がらない。建立実年代としましては、鎌倉時代の中期ごろのものではないかとされておりまして。



これ【スライド30】がお堂内の様子ですが、この須弥壇の上に、運慶の作った、教科書などによく出てきます八大童子が安置されていたのです。



【スライド32】
重文 木造不動明王坐像 一躯 金剛峯寺蔵

これ【スライド31】が須弥壇の上に安置をされていた状況を私たちが再現をしたものです。『不動明王八大童子秘要法品』というものを根拠にいたしまして仏像が作られています。



これ【スライド32】が中尊の不動明王です。これは行勝上人の念持仏という伝承があります。重文になっている平安時代末期のお不動さまです。彩色などは、その当時の状態のものが残っています。



これ【スライド33】が運慶さん。切手になったことがあります。制吒迦童子像です。美男子の青年の姿をした、凛々しい感じのします童子像が表現されています。静岡に願成就院という



【スライド34】 制吒迦童子像 部分

お寺がありますけれども、そこにも、運慶さんのこのような制吒迦童子像とか、矜羯羅童子像があります。その像は丸々とした赤ちゃんのような感じがします。大変張りのある肉身表現なのですが、その姿に比べ青年像の表現で運慶さんが製作した制吒迦童子像です。像内のほうに月輪形の銘札という、運慶さん独特の銘文を書いた杓文字形のような感じの銘札が中に込められているのがX線の撮影で確認できています。



これ【スライド34】が制吒迦童子像の上半身。いかにも美男子という感じで作られてあります。おなかのほうの肉身の張りのある表情とかそういうものも、人間の体をずいぶん研究なさって写實的に彫られたのだと思います。日本を代表する彫刻の一つです。



これ【スライド35】も運慶さんの作品です。矜羯羅童子像。現実におられるような写實的な顔をしています。展示しますと、「誰々に似ているね」と見ている人がよく談笑されるぐらいの、大変すばらしい写實的な表現が見られます。



【スライド36】 清浄比丘立像

これ【スライド36】は清浄比丘という童子さまです。ちょっと薄べったい感じで、先ほどの運慶の童子に比べますと、衣の表現とかそういうものが、やや平面的な感じのするものです。専門家の中では、快慶が作ったのではないかとされています。



【スライド37】 恵光童子立像



これ【スライド37】は恵光童子です。これも同じように、やや平面的な感じがします。運慶の先ほどの制吒迦童子像などに比べますと、少し表現ニュアンスが違う快慶作かなあという感じがします。



これ【スライド38】は恵喜童子という童子さんですが、これは、先ほどの運慶の作品とか、快慶ではないかと言われている2体の像から比べますと、やや胴長で、ちょっと全体的なバランスが異なる雰囲気があって、これは運慶・快慶と違う仏師が作ったのではないかと



【スライド38】 恵喜童子立像



【スライド39】 烏俱婆識童子立像



【スライド40】 指徳童子立像

【スライド41】 阿耨達童子像



【スライド42】 重文 木造四天王像 四軀の内(広目天像)
一軀 金剛峯寺蔵



【スライド43】 重文 孔雀明王坐像 一軀 金剛峯寺蔵



【スライド44】 重文 阿弥陀三尊立像 三軀 光台院蔵



【スライド45】 重文 阿弥陀如来立像 一軀 光台院蔵

われています。



これ【スライド39】は鳥俱婆識童子像です。これも少し表現が違うので、彫刻史の世界では、ちょっと運慶とか快慶作と異なる、慶派仏師の中の弟子筋の作品ではないかなと言われています。



これ【スライド40】は、八大童子の中で2体だけ、どういうわけか、壊れたのか何かはわからないのですが、新しく鎌倉時代の中期頃に作られたものです。先ほど、不動堂のところで、実年代は鎌倉時代の中期頃と解体修理でだんだんわかってきていますよと言ったのですが、どうも本来の八大童子がお祀りをされておりました本堂が、何かの事情がありまして現在の建物に変えられた段階で、この像を新しく作り直されたのではないかなと思われている指徳童子という像です。



これ【スライド41】も、同じように、新しく鎌倉時代の中期頃に作られました阿耨達童子です。龍に乗っておられまして、大変変わった表現の像です。なかなかこのような表現の仏像というのではない貴重な作品です。



これ【スライド42】は快慶の作品です。重文の「四天王像」です。高野山から東大寺の大仏殿の再建にかかった大勧進職を務めました重源が、高野山で結んでおりました専修往生院という念仏別処にあったものではないかと言われているものです。『南無阿弥陀仏作善集』という重源さんが自らお書きになりました中に出てくる真別処の四天王ではないかと言われている。

足のほどのところに「安阿弥快慶」という銘文があります。快慶の忿怒表現の作品というのは、あまり残っていないのです。快慶さんというのは、どちらかといいますと、阿弥陀さんとか、観音さん、勢至さんというような優しいお顔をした仏さんをたくさん作られ現存しています。

すけれども、こういうような四天王というのは比較的残っていません。かろうじて、記録では、奈良の東大寺の大仏殿のところに広目天像を作ったという記録はあるのですが、現在残っていません。そういう意味で、快慶さんの四天王の様子を窺うために大変貴重な像なのです。



これ【スライド43】も快慶さんの作品です。正治2年、1200年なのですが、一番最初に、高野山の伽藍の景色を説明しましたときに出てきました孔雀堂というお堂の本尊さんとして作ったものです。孔雀堂というのは、後鳥羽上皇が御願の堂として造られたのです。そこに、快慶さんに依頼をしまして、こういう孔雀明王像を作られたわけです。

一般的には、雨請いのためのお堂として造られたのだと言われてはいますが、歴史的にいいますと、後鳥羽上皇は、鎌倉幕府に謀反を起こしまして、「承久の変」を起こし失敗され流されてしまうわけですが、そういうような討幕運動を盛んに行われていた関係がありまして、ひょっとしたら、この孔雀明王法の中に調伏の法というのがありますので、そういう意味も含んで、高野山にお堂を造ったのではないかと思います。

通常、もともとあったものを再建するのだったらいいのですが、新しくお堂を造るときに、弘法大師空海が考えた伽藍の壇上の中にそういうお堂を造ること自身が、大変不思議な部分があるのです。人々はそれを避けてきた部分があるのですが、後鳥羽上皇だけは、わざわざ孔雀堂というお堂を造らせた。その背景に、どうも歴史的に隠された何かがあるかも知れません。



これ【スライド44】は、光台院というお寺に伝わっているものです。道助法親王さんがお造りになった光台院の本尊として「阿弥陀三尊」を快慶さんが作っています。京都の三千院へ行かれますと、お座りになった三尊像、来迎のお姿をしたものを見かけるとは思いますけれども、どうもこういうような立像で、脇尊の観音・勢至が、腰を屈めて表現されるというのは、快慶

さんが作り出した阿弥陀三尊像の一つの表現ではないかなとみられています。

五坊寂浄院というお寺にも、同じような姿形のものが、快慶の弟子筋が作った同じ姿の像が残っております。



これ【スライド45】が、先ほどの「阿弥陀三尊」の中尊のお姿です。大変すばらしいですね。衣の流れとかそういうものが、実に整った感じの姿です。後世「安阿弥様」と言って、世の中に快慶さんの阿弥陀さんの姿をもとに盛んに作られるのですけれども、その有名になった快慶さんの安阿弥様の最たる阿弥陀さんの基本的なお姿をしている、重要文化財になっています光台院の「阿弥陀三尊」の中の本尊さんです。



これ【スライド46】は、「普賢延命菩薩像」と言いまして、密教の延命修法に使われた鎌倉時代13世紀の正智院に伝わっています仏画です。「普賢延命法」という修法の本尊として描かれたものです。



これ【スライド47】も、鎌倉時代の中期ぐらいのもので、高野山の弘法大師の住坊であった中院の竜光院という所に伝わっております伽藍御影堂の真如親王様の弘法大師のお御影を写さ



【スライド47】
弘法大師像 一幅
竜光院蔵

れた鎌倉時代の「弘法大師像」です。伽藍の御影堂へお詣りしていただきましても、真如親王様が描かれた御影はご覧になっていただけません。真言宗のお坊さんでも、一生に一度だけしか拝めない大変貴重なものです。その伝統のあるお御影を写したものと言われているものです。



これ【スライド48】は、日本の三大不動と言われています高野山の「赤不動」です。三大不動といいますと、三井寺の黄不動、青蓮院の青不動、そして、高野山の赤不動と言われています。

天台宗の円珍さんが葛川で修行中に感得した像なのだという伝承があります。そういう伝承がありますので、もともとは比叡山のほうに伝わっていったものなのだと思いますけれども、近世になって突然、「赤不動」という名前がしきりに文書の中に出てきますので、江戸時代初頭頃に高野山に移されたものであるのかもしれませんが、そういう意味では、元比叡山にあったものが転々として、高野山に伝わってきたものではないかと思います。



これ【スライド49】は、弘法



【スライド46】重文 普賢延命菩薩像 一幅 正智院蔵



【スライド48】重文 不動明王二童子像(赤不動) 一幅 明王院蔵

大師が一番最初に行われました大仁王会という儀式の法要を、高野山の政所であった紀の川のほとりにあります九度山の慈尊院でおこなわれましたが、そのときの大仁王会の本尊さんの伝統を受け継いでいると言われております。鎌倉時代に描かれました重要文化財になっています「五大力菩薩像」というものです。

「五大力菩薩像」といいますのは、旧訳の『仁王経』に説かれています仏さまです。新訳『仁王経』による五大明王は、東寺などに現存しているように盛んに作られるわけですが、高野山の場合はどういうわけか、仁王会は旧訳に基づいた「五大力菩薩像」が本尊として祀りされていたようです。

だから、これとは別なのですが、普賢院というお寺に、重要文化財になっています白描の「五大力菩薩像」があります。普賢院の像は、もともとは大阪の住吉大社の神宮寺に伝わっていたものなのですが、その白描図像が江戸時代に高野山に移されて、現在、重要文化財になっています。どうも高野山の古い伝統に基づいて行われている法要のところに、ほかで使われなくなった五大力菩薩像が江戸時代の頃に奉納されて、高野山に伝わってきたような経緯があるようです。

これ【スライド50】は、寛元2年という年に、醍醐寺に胎藏界の大日如来像を、高野山には金剛界の大日如来像が開眼されて納められたと言

われています。重要文化財の「大日如来像」の画像で鎌倉時代のものです。

これ【スライド51】は、南北朝時代、奈良の絵仏師祐円という人が、高野山から依頼を受け描かれたものです。どちらかといいますと水墨画タッチの感じです。山水のところに滝が流れていまして、岩のところにお地藏さんが描かれております。実に優しい感じのしますお地藏さまのお姿をしています。仏画で絵仏師の名前がわかるものというのはほとんどないのですが、そういう意味では、南都系の絵仏師の祐円が描いたものが高野山に伝来する珍しいもので、宝寿院というお寺に伝わっている重文の仏画です。

これ【スライド52】は、鎌倉時代以降、南北朝時代ぐらいになりますと、縁起絵巻物が各所で多数作られますが、この絵巻きは、弘法大師信仰を背景に製作された弘法大師伝の6巻本のものです。地藏院というお寺に伝わっております重文の「弘法大師行状図画」といいます。弘法大師伝絵巻で、現存している一番最古の絵巻ではないかと言われている中の遣唐使船の部分で、延暦23年に弘法大師空海が中国に渡っていくときの遣唐使船の様子を描いたものです。

これ【スライド53】も、同じ地藏院の「行状



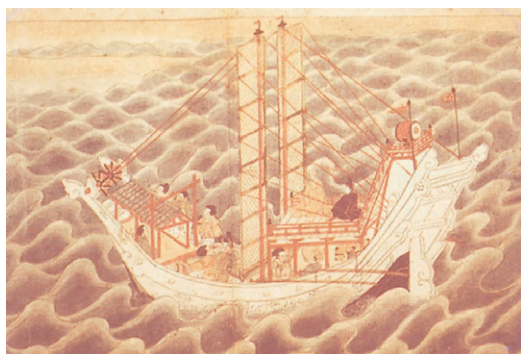
【スライド49】重文 五大力菩薩像 一幅 北室院蔵



【スライド50】重文 大日如来像 一幅 金剛峯寺蔵



【スライド51】重文 地藏菩薩像 一幅 金剛峯寺蔵



【スライド52】重文 高野大師行状図画 地藏院蔵

図画」の中の1場面で、弘法大師が入定なさって奥の院に移される場面で、お弟子に担架に乗せられまして奥の院の入定場所に運ばれる場面を描いたものです。大和絵絵巻の中でも優れた作品の一つとされています。



これ【スライド54】は、神道と密教とが混交

【スライド54】
重文 弘法大師丹生高野明神像問答講本尊
一幅 金剛峯寺蔵



した「問答講本尊」というものです。真ん中に弘法大師のお御影、下の方は高野山の地主の神さま丹生都比売明神と高野明神です。また、上のほうに、奥の院の弘法大師御廟のあたりの風景をかいてあります。下のほうには、高野山の山麓にあります丹生都比売神社といいまして、高野山の地主の神さまをお祀りされております神社があるのですけれども、その社頭の風景を描いたものです。上下の絵は「一遍上人絵伝」に大変近い絵です。真ん中の絵は、どうも室町時代の初頭頃の絵です。もともと問答講というのは、丹生都比売神社で鎌倉時代から行われる



【スライド53】高野大師行状図画 部分

ようになったのですけれども、一時中断をしておりまして、室町時代に復興をするのです。そのときに、どうも装丁を変えられたのではないかと思います。上辺の部分と下辺の部分と中央とは、実は画面が切れているので、装丁が変えられ再構成された絵のように思います。大変変わった神仏混交の様子を伝える高野山独特の信仰をもとにした絵です。



これ【スライド55】は、お市方の肖像画です。織田信長の妹さんで浅井長政に嫁いだ悲劇の人として、歴史的に有名な人です。高野山に、このような諸大名の関係の肖像画というのはずいぶん残っています。昔から高野山は、戦国時代以来、さまざまな武将と高野山のお寺が檀縁地関係を結んだ関係がありまして、こういうような肖像画がたくさん伝わっております。



【スライド55】
重文 浅井長政夫人像 一幅 持明院蔵





【スライド56】国宝 阿弥陀聖衆来迎図 三幅 有志八幡講蔵

最後になりますけれども、これ【スライド56】は、国宝の「阿弥陀聖衆来迎図」というものです。もともと比叡山の安楽谷、横川の一つの枝に分かれております谷の所に、どうも安楽谷の本堂というものがあまして、そこにお祀りをされていた来迎図なのですが、歴史的には有名な元亀2年の織田信長の比叡山攻めの時、どうも山のお坊さんが、こんな大事なものを焼かれては困るというので持ち出したものを、里のほうで警備番をしていました武将の手におちたものです。本多廣孝という徳川方の武将が家康に命じられまして織田軍に参加をし手に入れて、一度自分の領地の関東のほうに持ち帰ったようです。その後、天台密教僧であった尊秀という人が天正15年に修理をした記録があります。

それがなぜ高野山に伝わったかということ、文禄2年、豊臣秀吉がお母さんの菩提のために高野山に青巖寺というお寺を造るわけですが、政治的なものがあつたのだと思いますけれども、徳川方から、秀吉が造った青巖寺に、この画像を奉納されたようです。青巖寺の落慶供養願文に持仏堂にこの図と考えられる来迎図が祀られたことがかかれていたようです。それ以来、高野山はこれをずうっと守ってきたのです。

逸話なのですが、今春に比叡山と高野山の名宝展を開催している過程で、比叡山のお坊さんがこの来迎図を「高野山に略奪された」と言われて、私も困ったことがありますけれども、「そういうような歴史的な背景があります

よ」という説明をさせていただきましたら、なるほどと了解いただいた経緯があります。

中央に阿弥陀さんが描かれてありまして、周りのほうに二十五菩薩の仏さまがかいてあります。真ん中が阿弥陀さまで、下の向かって右が観音さま、左が勢至菩薩です。また、向かって左の幅の上のほうに三つの仏さまがかいてあります。これが阿弥陀三尊です。真ん中が阿弥陀さまで、こちらが観音さま、これが勢至菩薩です。同じ画面の中で同じ仏さまが二度かいてあります。大変不思議な感じです。実は、これは、絵巻物などでよく出てきます異時同図法という画法を使っています。阿弥陀さまが極楽浄土を出発されまして、亡くなった人を現世にお迎えにこられているわけですが、左の幅まで来られまして、さらに真ん中のほうにグーッと降りてこられましたよという時間の差を表すために、こういう表現が使われています。

宇治の平等院の扉絵のほうにも来迎図がかかれてありますけれども、その中の2面ほどに、こういう同じような異時同図法に基づいた表現の来迎図があります。そういうような伝統的な絵画手法が、この絵でも使用されています。

昔から、源信の作と一応言われているのですが、様式的には平安時代の終わりの12世紀の末ごろの作品ではないかと、専門家の中ではみられています。しかし、正面に向かって来迎する構図の来迎図としては、この絵しか伝わっておりません。大変有名な絵です。



これ【スライド57】が、画面の左幅の下のほうにかいてありますすばらしい大和絵の山水です。仏さまの姿形は、専門家の立場からいいますと、上手ではありません。この絵は専門の仏画師でなしに、宮中などで活躍しておりました絵巻などの世俗画をかいておりました絵仏師の作品ではないかと思われます。



実は、私がちょっとと解明したのですけれども、33の仏さまを写真に撮りまして、画面の仏さまと同じ大きさにした型紙を造りましてこの絵【スライド58】の仏さまとあわしませて気が付いたのですが、まず最初に雲をかいて、仏さまの配置とかそういうものを型紙を作って構図をきめて下絵を描いたようです。同じ型絵を用いたお顔が多いので同じような顔をしている仏さ

まが多数います。

また、仏さまは、いずれもいろいろな楽器を持っていますが、ほとんど口を開いています。どうも二十五菩薩和讃のようなものを唱和し、妙なる音楽をかなで極楽浄土から降りてくるのですよという、『今昔物語』などで妙なる音が聞こえたことによって極楽浄土に生まれ変わったのだというお話がかかれておりますけれども、そういう話しの情景もこの絵の背景にあるように思います。

鎌倉時代の来迎図のそういう諸尊の仏さまというのは、どちらかといいますと、こういうような口を開いた感じの、何かを語りかけているような表現のものはほとんど見られません。そういう意味で、平安時代の人々が求めた弥陀来迎の情景がこの絵の中に込められているのかもしれない。



【スライド57】 阿弥陀聖衆来迎図 部分



【スライド58】 阿弥陀聖衆来迎図 部分



これ【スライド59】は、腰太鼓をたたいている菩薩です。この菩薩も同じように口を開いておられまして、どうも和讃を唱えているようです。

この【スライド60】菩薩は最たるものです。死を迎えられる人に、死というのは何も怖くありませんよ、極楽浄土に阿弥陀さまがお連れするためにお迎えにきましたよとの思いが表情に現れています。このような表現は、死に対する恐怖感を取り除くための一つの表現で、こういう浄土教絵画の中で、これほど明るい表情のニコッと笑った菩薩のいる仏画というのは、この絵しかありません。そういう意味では、往生という思想をその頃どうとらえていたかということがわかる、大変すばらしい来迎図だと思います。もう時間がまいりましたので、私の説明を終わらせていただきます。(拍手)(了)

【スライド59】 阿弥陀聖衆来迎図 部分



【スライド60】 阿弥陀聖衆来迎図 部分



● 高野山の歴史と文化財

高野山霊宝館主任学芸員 井筒 信隆

1) 国・県指定文化財数（1996.3.5現在）

国 宝	25件	4,695点	県指定	36件	2,878点
重 文	177件	14,204点	計	238件	21,777点

(内訳)

	建造物	絵 画	彫 刻	工 芸	書 跡	考 古	史・名・天
国 宝	2(2)	8(21)	2(9)	1(1)	12(4,662)	0(0)	——
重 文	12(24)	50(129)	51(77)	30(72)	30(13,676)	3(224)	2(国指定)
県指定	4(7)	10(23)	1(1)	16(2,851)	2(3)	0(0)	8(県指定)

2) 高野山霊宝館収蔵指定文化財

国 宝	23件	4,693点	県指定	13件	2,850点
重 文	132件	14,124点	その他 未指定収蔵文化財 10万点以上収蔵		

3) 高野山の歴史と文化財

■(平安時代前期の歴史と現存文化財)

高野山は、弘仁7年(816)に、弘法大師空海によって真言密教の道場として開かれた山である。空海は、高野山に真言密教の教理に基づく壮大な伽藍を創案し建設を行ったが、金剛峯寺伽藍建設なかばで世を去った。大師創案になる伽藍の完成は高野山第2世真然大徳(僧正)時代の、仁和3年(887)頃である。約70年の歳月をかけ完成した金剛峯寺伽藍において真言密教僧の実践修行が本格化し始めた矢先に、宗祖空海が中国で書写し持ち帰った真言密教の精髓等を書き留めた『三十帖策子』の帰属を巡って、高野山金剛峯寺と東寺(教王護国寺)が争い、延喜17年(917)から約5年間は廃絶に近い状況に陥った。延喜21年(921)高野山奥の院に入定する空海に、朝廷から「弘法大師」の大師号が贈られ、東寺長者金剛峯寺座主観賢が朝廷から贈られた僧衣を入定する空海の衣を着せ替えたことから、その後弘法大師入定信仰が高野山に芽生えた。しかし、確たる寺領を持っていなかった高野山は経済的に恵まれずかろうじて伽藍維持が計られる状況であった。正暦5年(994)には、伽藍根本大塔の落雷がもとで、伽藍御影堂を残し諸堂や僧坊寺院が悉く焼失して衰亡する。

弘法大師空海が弘仁7年(816)に高野山を賜った以降の9世紀・10世紀の歴史は、弘法大師空海の私寺として開創されたことから寺領が無く、加えて雷火による堂塔の焼失と言う自然災害も重なってまさに多難な時代であった。

■(9世紀・10世紀の主な文化財)

国宝	聾瞽指帰	2巻	(金剛峯寺蔵)	弘法大師筆 平安前期
国宝	諸尊仏龕	1基	(金剛峯寺蔵)	弘法大師請来品・中国唐
重文	金銅仏具	8口	(金剛峯寺蔵)	中国唐・平安前期
重文	釈迦如来及諸尊像(枕本尊)	1基	(普門院蔵)	中国唐
重文	板彫胎藏曼荼羅	2枚	(金剛峯寺蔵)	中国唐
重文	崔子玉座右銘断簡	1幅	(宝亀院蔵)	伝弘法大師筆 平安前期
重文	木造大日如来像	1軀	(金剛峯寺蔵)	平安前期
重文	木造不動明王像	1軀	(正智院蔵)	平安前期
国宝	文館詞林	12巻	(正智院蔵)	平安前期

■(平安時代後期の歴史と現存文化財)

衰亡していた高野山は、11世紀にはいるとようやく復興の気運が持ち上がり、南都興福寺の勧進僧であった祈親上人定誉が来山し伽藍諸堂の復興にあたった。また、高野山の勧進僧は弘法大師入定の霊地を説き、高野山は、この世の浄土であることを唱導し高野山参詣を勧めた。治安3年(1023)藤原道長が高野山に参詣し、奥の院の弘法大師廟に弥勒浄土往生を願う法華経や理趣経の埋納経を行ったことから、藤原摂関家や皇族関係者が相次いで来山し、貴族や皇族関係者による荘園の寄進や子院の建立が盛んとなり復興が進んだ。また、高野山の復興に参加した勧進聖達が真言念仏の拠点として、山上の各谷に庵室や寺院を建立した。12世紀にあっても、山上の寺院建立は盛んに行われた。その代表的なものに、覚鑿による密厳院や大伝法院の建立、覚法法親王の勝蓮華院、西行法師の庵室、後に東大寺勧進職になった俊乗房重源の新別所専修往生院などがある。このような高野山の活況は、久安5年(1149)の落雷による伽藍焼失も、平家の平忠盛、清盛父子による成功寄進によって、直ちに再建されるなど寺勢はすこぶる盛んであった。

■(11世紀・12世紀の主な文化財)

国宝	仏涅槃図	1幅	(金剛峯寺蔵)	応徳3年(1086)作
国宝	善女竜王像	1幅	(金剛峯寺蔵)	久安元年(1145)作
国宝	勤操僧正像	1幅	(金剛峯寺蔵)	平安後期
国宝	伝船中湧現観音像	1幅	(龍光院蔵)	平安後期
重文	両界曼荼羅図(血曼荼羅)	2幅	(金剛峯寺蔵)	久安6年(1156)
重文	阿弥陀浄土曼荼羅図	1幅	(西禅院)	平安後期
重文	木造大日如来及び脇侍像	3軀	(金剛峯寺蔵)	平安後期
国宝	色紙法華経	1巻	(金剛峯寺蔵)	平安後期
国宝	金銀字一切経	4,296巻	(金剛峯寺蔵)	大治3年(1128)
重文	紺紙金字一切経	3,575巻	(金剛峯寺蔵)	平治元年(1159)
国宝	宝簡集類	311巻	(金剛峯寺蔵)	平安後期～江戸時代
重文	比丘尼法薬埋納経関係品	22点	(金剛峯寺蔵)	天永4年(1113)
国宝	澤千鳥螺鈿時絵小唐櫃	1合	(金剛峯寺蔵)	平安後期
重文	紙胎時絵念珠箱	1合	(金剛峯寺蔵)	平安後期

■(鎌倉時代以降の歴史と現存文化財)

鎌倉時代の高野山は、鎌倉幕府の強い影響を受けながら、建久8年(1197)に八条女院御願により行勝上人が一心院本堂(不動堂)を建立するなど、平安時代後期の寺勢を維持し発展した。特に、北条政子が源頼朝・実朝の菩提を祈り禅定院を建立し、さらに、同院を拡張して承久元年(1219)に金剛三昧院を建立するなど、武家の出家来山止住や荘園寄進があいついだ。また、高野山の弘法大師信仰や浄土信仰が全国に定着していった。鎌倉幕府は、高野山の拠点となった金剛三昧院を中心に、僧侶の学問奨励のために弘法大師著作物の木版印刷(高野版)を行い、修学の為に勧学会を実施するなど宗教文化活動に積極的に援助をした。さらに、平安時代以来ふもとの九度山から高野山までの参詣道(高野山町石道 約17km)に1町毎に建立されていた木製卒塔婆を石製に変える事業に対しても積極的に加担をし高野山に対する援助を惜しまなかった。

鎌倉末期から南北朝時代にかけての争乱期にあっても高野山の影響力に期待をして、南朝・北朝相方の関係から高野山勢力の取り込みをはかる勧誘が盛んであったが、中立の態度を崩さず護持を計った。

室町時代には、南北朝の中立策が幸いし、室町幕府の帰依を受けるとともに、高野山に教学整備が進められ、その後の高野山教学の基礎が確立された。しかし、室町幕府の勢力が減退して戦国時代にはいと全国におよそ30万石と言われていた荘園が戦乱の影響を受け、各地で戦国武士により略奪を受け経済的な困窮期を向かえることになった。高野山では、その対応策として、各地の有力戦国大名と高野山の子院が檀縁地関係を結び荘園の維持をはかることが行われた。この関係は、後世江戸幕府の幕府政策の参考にされ、江戸時代の大名と高野山子院との強固な檀縁地関係が生まれる先駆けとなった。室町時代末期には、織田信長による高野攻めによる危機に陥るが、明智光秀による本能寺の変が起こり、廃亡の直前で奇跡的に危機を免れた。長期にわたる戦乱で、高野山の経済的基盤は弱体化し、山上の堂塔や寺院は荒廃をしていたが、豊臣秀吉による天下統一の過程で、秀吉の高野攻に際して荘園の放棄を条件に和睦を結んだことから、秀吉の天下統一後、秀吉は亡母の供養のために青巖寺を高野山に建立するなど全面援助を行い堂塔等の再建や補修を行なった。また、2万1千石の寺領が高野山に秀吉によって与えられた。

江戸時代には、幕府の幕政の指導もあって、高野山の寺院は各地の大名と檀縁地関係を結び寺院の維持をはかる。徳川霊台や奥の院墓地に林立する大きな諸大名の五輪塔群等は、その歴史文化遺産である。しかし、高野山も諸大名と同じく参勤交代の制度が課せられるなど、幕府による締め付けが強く経済的弱体化は避けられず寺勢維持にやっとであった。

明治時代には、廃仏毀釈や寺領の停止等の影響を受け、その経済的、政情的難局を乗り越えるため、約500の寺院を統廃合して130カ寺に縮小され維持がはかられた。このような、様々な歴史の変遷を経ながらも、弘仁7年(816)に弘法大師空海によって開創されて以来、約1,180年の歴史と伝統を維持し現在に至っている。当然の如く、永い歴史の流れの中で築られてきた歴史文化は、高野山に膨大な文化遺産を遺し伝存されてきた。まさに高野山は、我が国にあって他に類例のない「文化財の宝庫」であると言っても過言ではない。

■(鎌倉時代以降の主な文化財)

国宝 諸尊仏龕	1 基	(金剛峯寺蔵)	弘法大師請来品・中国唐
国宝 金剛峯寺不動堂	1 棟	(金剛峯寺蔵)	建久8年(1197)

国宝	金剛三昧院多宝塔	1 棟	(金剛三昧院蔵)	承久元年(1219)
国宝	八大童子像(運慶作)	8 軀	(金剛峯寺蔵)	建久 9 年(1198)
重文	木造四天王立像(快慶作)	4 軀	(金剛峯寺蔵)	建久年間
重文	木造孔雀明王像(快慶作)	1 軀	(金剛峯寺蔵)	正治元年(1200)
重文	普賢延命菩薩像	1 幅	(正智院蔵)	鎌倉前期
重文	不動明王像(赤不動)	1 幅	(明王院蔵)	鎌倉前期
重文	五大力菩薩像	1 幅	(北室院蔵)	鎌倉前期
重文	大日如来像	1 幅	(金剛峯寺蔵)	鎌倉後期
重文	毘沙門天像	1 幅	(光台院蔵)	鎌倉後期
重文	弘法大師丹生高野明神像(問答講本尊)	1 幅	(金剛峯寺蔵)	南北朝
重文	地藏菩薩像	1 幅	(宝寿院蔵)	至徳元年(1384)
重文	弘法大師行状図画	6 巻	(地藏院蔵)	南北朝
重文	武田信玄像	1 幅	(成慶院蔵)	室町後期
重文	浅井長政夫人像(お市方)	1 幅	(持明院蔵)	室町後期
重文	奥院経堂(石田光成建立)	1 棟	(金剛峯寺蔵)	慶長 4 年(1599)
国宝	山水人物図(池大雅筆)	10 面	(遍照光院蔵)	江戸前期

■(参考)弘法大師空海略伝

空海は、奈良時代末期の宝亀 5 年(774)に讃岐国多度郡(現在の香川県善通寺)に生まれ、18 才の時、都の官立大学に入学するが官学の講義に失望し、仏道修行をはじめ、大学を中退する。24 才に当たる延暦 16 年(797)に『聲磬指帰』(別名『三教指帰』)を著し僧侶になることを宣言する。その後、南都大安寺の勤操大徳に従って仏道修行に励み、延暦 23 年(804)に中国唐に留学し、恵果和尚より真言密教を伝授され大同元年(806)に、多くの真言密教の請来品を持参して帰国した。その後、嵯峨天皇と漢詩や書道の交流を通じ親交を深め、一方、真言密教の秘法である「仁王経法」を修して国の平和を祈り、弘仁 3 年(812)天台宗の伝教大師最澄等に結縁灌頂を授けたなど、唐より伝えた真言密教の宣揚につとめた。

弘仁 7 年(816)に空海は、紀伊国高野山を真言密教修禪の道場として建立をいたしたい旨を朝廷に願い出て許され建設を始める。弘仁 12 年(821)四国満濃池築造、弘仁 14 年(823)東寺造営、天長元年(824)神泉苑で祈雨を祈る。天長 5 年(824)庶民の為の学校を日本で初めて創立する。真言密教の宣揚、社会事業、高野山金剛峯寺の建設等々活躍し、承和 2 年(835)建設途次にあった高野山に於いて入定する。

一 空書写聖教関係リスト(宝寿院蔵「聖教」普通部 3 - 3 号箱所在 無量寿院)

高野山宝寿院には、膨大な量の聖教古文書類が現存し高野山霊宝館に保存収蔵している。特別部については、この宝寿院伝来の聖教類の中から經典、儀軌、次第、思想書等の貴重書を抽出分類されている。普通部については比較的時代が新しいこともあって、ほぼ当時の状況で現在まで伝えられている。この「普通部 3 - 3 号箱」は、中院或いは無量寿院にいた「一空」と称した人物の聖教が収められている。

沙門一空の消息を知るものは少ないが、本聖教の奥書の年齢記述から江戸時代中期の元文 4 年(1739)に生まれ、十代後半に高野山に入山している。

聖教名	数量	書写年	年齢	(整理番号)
1 四度加行口決	1 冊	宝暦 7 年(1787)仲夏下旬書写	18歳	(14)
2 七曜攘災決	1 冊	宝暦 8 年(1758)5 月 3 日書写	19歳	(12)
3 星供次第	14帖 1 帙	宝暦 8 年霜月～明和 7 年 6 月 3 日書写		(49)
4 揀擇持日編	1 冊	宝暦 8 年10月21日書写		(10)
5 入壇宿曜吉凶星宿属生人次第	1 冊	宝暦 9 年(1759)正月21日書写	20歳	(105)
6 理趣經法私次第	1 帖	宝暦 9 年12月20日書写		(40)
7 大日劍印	1 帖	宝暦13年(1763)書写	24歳	(92)
8 持戒清淨口決	1 卷	宝暦13年10月15日書写		(86)
9 中院相傳(永遍記)	1 冊	宝暦14年(1764)3 月21日書写	25歳	(60)
10 金剛界梵字次第	1 帖	明和元年(1764)8 月15日書写		(19)
11 金剛界黃柁次第	1 帖	明和元年 8 月21日書写		(26)
12 中院本流聖教目錄	1 冊	明和元年10月17日書写		(99)
13 御本地供私次第	1 帖	明和 2 年(1765)正月 日書写	26歳	(50)
14 別行次第(中院)	1 帖	明和 2 年 2 月 日書写		(33)
15 朝暮例時作法(宥快)	1 帖	明和 2 年春中旬書写		(96)
16 参拾帖目錄(仁和寺御室)	1 冊	明和 2 年 4 月 6 日書写		(98)
17 道場觀集	5 冊 1 帙	明和 2 年 4 月10日～8 月 5 日書写		(81)
18 灌頂五瓶等作法	1 帖	明和 2 年 6 月21日書写		(57)
19 形像開光法	1 帖	明和 2 年 7 月21日書写		(70)
20 東寺三学十度異名諸流私記	1 冊	明和 2 年夏上旬書写		(95)
21 神供作法(中院)	1 帖	明和 2 年 9 月12日書写		(31)
22 大日經疏密印品秘訣	1 冊	明和 3 年(1766)正月11日書写	27歳	(7)
23 十八道真言句義抄	2 冊 1 帙	明和 3 年 2 月 日書写		(6)
24 五輪投地次第	1 冊	明和 3 年 3 月 7 日書写		(23)
25 無盡莊嚴次第私記	1 冊	明和 3 年 3 月20日書写		(20)
26 胎藏作礼方便次第	1 冊	明和 3 年季夏 1 日書写		(22)
27 施餓鬼法	1 帖	明和 5 年初冬中旬書写	29歳	(51)
28 天野伝(信日記)	1 冊	明和 5 年霜月書写		(4)
29 十一面觀音法	1 帖	明和 5 年 6 月 日書写		(74)
30 飛行三股事	1 冊	明和 5 年 7 月 3 日書写		(97)
31 弥勒法	1 帖	明和 5 年 9 月 5 日書写		(39)
32 五色糸作法兩界(中院)	1 帖	明和 5 年9月 日書写		(55)
33 明算御受法次第	1 帖	明和 5 年10月下旬書写		(90)
34 中院結縁灌頂	28帖 1 帙	明和 6 年(1769)5 月 7 日～10月 5 日	30歳	(58)
35 十一面觀音法	1 帖	明和 7 年(1770)4 月21書写	31歳	(38)
36 後夜念誦(中院流)	1 帖	明和 7 年 6 月16日書写		(68)
37 愛染法	1 帖	明和 7 年 6 月17日書写		(41)
38 仏眼法(中院)	1 帖	明和 7 年 6 月21日書写		(34)
39 中院三十三尊法	33帖 1 帙	明和 7 年 6 月28日書写		(52)
40 護摩口訣	1 帖	明和 7 年孟商下弦書写		(1)
41 四種護摩抄記(石山)	1 冊	明和 7 年 9 月 日書写		(2)